



鳶工 長島大登さん

平成10年旭川市生まれ。令和2年、21歳で市内の堀組に入社。社内最年少の鳶工です。

Check!!

江戸の火消しは鳶だった!?



祭りなどで披露される「纏振り」「はしご乗り」。江戸の火消しの伝統の技ですが、当時の火消し組には高所が得意な鳶も加わっていました。良き伝統の継承も鳶のプライド。

技能の世界 WORLD OF SKILL

巧みな技術で私たちの暮らしを支える職人たち。経験を重ねるごとに魅力を増す、技能の世界を紹介します

【詳細】産業振興課 65・7047

File No.12

とび 鳶工

工事現場で高所作業にあたるスペシャリスト。今回紹介する、工事や建築の現場で足場を組む「足場鳶」のほか、高層ビルや送電塔など高所で活躍する職人全般を指します。

丁寧に仕事を教えてもらえて、なんとかやっています」と言う長島さんに、厳しいこの仕事のやりがいを聞きました。「足場鳶の仕事は、足場を撤去すれば完了です。でもその瞬間は、自分の仕事が建物に刻まれたということ。そこになんともいえない達成感があって、やりがいを感じています」。

鳶の伝統はどうなっていく?

伝統的な鳶の世界も、昨今の厳しい情勢の影響を受けています。特に他の業種と同様、なり手不足は大きな課題。旭川鳶土工事業組合（組合長 堀和仁）では各種講習や、とび1、2級技能検定講習で若手技能士の育成を図る一方、年々増加する外国人労働者の教育にも注力しています。もちろん安全性の一層の追求や正社員としての安定雇用など、時代に即したアップデートも欠かしません。

長島さんは「鳶を始めて4年目ですが、これまでこれからもいろんな現場で勉強が必要だと思っています。鳶は好きで長く続けていきたいですし、1日でも早く先輩たちの仕事ぶりに追いついていきたいです」と鳶の未来を担う頼もしい若者の姿がそこにありました。

自然体でこなす高所の伝統技術

職人肌の性格と鳶への憧れ

物静かで確実な仕事ぶり。まさに職人の雰囲気が漂う長島さんですが、時折25歳の若者らしい爽やかな笑顔を見せてくれる好青年です。鳶は「飛び」が語源とされるほど、足がすぐむような高所が仕事場。鳶の仕事に就いた理由は「足場を組んで仕事するのがかっこよく見えました。高い所も別に…」と、こともなげに言います。

技とチームワークの両方が大切

この日は小学校の耐震工事に伴う高所作業。取材時は足場の解体中でした。数人が連携する作業が多く、声をかけ合いながら進めます。

最年少の長島さんの作業風景の撮影中には、先輩たちから次々と盛り上げる声が。和やかで明るい雰囲気の中、テキパキと足場を外していく作業にはプロの技が光っています。

鳶工のやりがいとは?

「仕事はきつさもあるけど、僕は会社と先輩に恵まれていると思います。